

## 逍遙「細君」試論

和田繁二郎

「細君」は明治二十一年十一月初旬に起稿され、二十二年一月の「国民之友」新年号の附録に掲載された作品である。内容は、新しい教育を受け、自我に目覚めた人妻が、離縁されるに至るまでの悲劇を描いたものである。

人間の不仕合せは、無論其時の運不運、理窟を言へば、鬚の有無にて差等のあらう筈はなけれど、さうばかりにも言へぬが浮世格別気の毒なるは鬚なき人の身の上なり。誰か束髪と共に女の身方殖えしといふや。同権論を書く主人も原稿料を得し後までも竟に持論を行はねば、細君はいつまでも頭の上る時はなし。誠に唐人のいひし通り、つまらぬ者は女なり。かよわい背中へ行路難を負されて、五十年が其間、殿さまの言ひ附け通り、右へ向け、左へ向け、束髪がよい、丸鬚に限る、洋服を着な、紋附にせよ、斯うせい、あゝせいと無理難題。それをイヤといへば、曲事も、と大筆特書した七去の定め、三従の掟は廃れたれど、楽屋を窺へば扱もくくなり。(逍遙選集 別冊一 八四一—ページ)

このような記載によつてみると、この作品は、人妻の置

ところによると、

旦那は浮気者で、色々のシヨイコミをして困りながら、其癖きれいに手を切るといふ器用な機転はなく、たべちらかして歩くといふ事、先達でも茶屋女をどうかして五十円手切をとられたといふ事、今も毛色の変つた囲ひものがあるとの事(八二六—ページ)という状態であり、性格的に放縦なたちとして描かれている。そしてまた、思想の面では、新しいことを言うのであるが、前掲の通り、「同権論を書く主人も。原稿料を得て後まで。竟に持論を行はねば、細君はいつまでも頭の上る時はなし。」という状態である。これは当時の進歩的な発言をする人士の陥りやすい一般的傾向を言つていようでもあるが、さしあたりこの主人公の言動について言つていふものと見ねばならない。つまり、この主人公は思想と行動の一致しない不徳義漢として描かれている。この夫の放埒な生活から、決定的に妻の不幸が生じてくるのである。細君お種は「身を徒らに巢守となし、空聞に眠ることを嬉しと思はず」ということになつたのである。さらに最後には、お種は家名を汚したという理由で、一方的に離縁されてしまうのである。

次に、細君お種の不幸をまねきよせたものは、里の母親である。この母親は継母で、実子(お種の異母弟)の放蕩の尻ぬぐいのために、しばしばお種に無心を言いくる。

かかっている不幸な位置に注目し、その不幸に義憤を感じながら、執筆したものと見られる。そこに、逍遙の女性観、あるいはヒューマニティーも予想されるのであるが、この作品が、それをどの程度に具現したものであり、また、彼の小説神髓の理論などと、どのような関連をもつかという点は、再検討すべき余地を残しているように思う。いまそのために、その悲劇の性格、意味を究明し、その人物形象を通じて、逍遙の意図や真意を探つてみたいと思う。

まず悲劇の主動力をなしていると見られるのは、夫、下河辺定夫である。これについては、

夫某と言ふは、当時才子、学者、洋行済、日の出の官吏、評判よき著述家などいふ資格にて、世間に名の聞えし紳士なり。年齢はまだ三十一。(八四二—ページ)

と書かれている。ところが、この人物の陰の部分、痴愚と頹廢に色どられている。女中の言として述べられている

一つには父親のお人よし、それを見のがしているようであるが、結局この無心が儀理にからんで、お種を窮地に陥れてしまうのである。

もう一つお種の不幸の原因は、夫のことと関聯することであるが、下河辺家の家計不如意にもある。

又、昔からの借金が嵩み、内輪は立派な火の車(八二六—ページ)

羽織袴一組にて社会に出でし若武者の習ひとて、今尚種々の負債多く、其催促、絶間無ければ、夫に代る細君の身は、間のわるき事も多かるべし(八四二—ページ)

とある。このようなままならぬ家計ゆえに、母の無心のために、ひそかに自分の着物を入質せざるを得なくなり、夫を怒らすことになつてゆくのである。もつとも。逍遙は「されど当世の紳士に連添ふものは、誰れかさる筋を細君の義務と観じ、浮世の習ひと諦めざらんや」と言つて、この貧しさや、金のやりくりは、別に細君の不幸としては取上げるほどのことではないという言い方をしている。問題は人的関係にあつて、つまりこの場合は、たとえ貧しくて、夫が実直で親切であればこのような悲劇は生じ得ないとするものの如くである。しかし、この場合、この貧しさを、逍遙の理解にかかわらず、明かにお種の不幸の一要因をなしていることは間違いない。つまり、夫はお種の申

出でを承知できぬ程度の、財政状態であつて、それだから、お種は夫に無理が言えず、自分で自分の着物を入質するようになったのである。

このようにみてくると、お種の不幸の原因は、夫定夫の人間の、経済的条件と、母親にあることになる。とくに夫の不行跡横暴が決定条件になるわけだが、これは口では新しいことを言つていながら、実際の行動はそれに伴わないエセ近代知識人の実態を衝いたものと見られる。そして、そういう新しいはずの知識人が依然として封建的な横暴をこととするに対して、逍遙が批判し、抗議をしているものと認めることができる。

もう一つ母親の存在は、これも封建的な圧力であつて、家の制度の中で母親の権力の不当な行使が不幸を将来しているわけである。それに、継母という条件を附与しているところは、いささか義理人情的な葛藤を設定したことに、戯作的な結構を匂わせるのであるが、この条件は一応家の制度の中で親の権威を純粋な形で拡大し得ているので、この場合、必ずしも必然性のないものではないと思われる。

このように、お種は、夫と母親との両面からいたためつけられ、直接には夫から悲痛を与えられるように仕組まれている。しかし、一方この女主人公であるお種がどのような半可の害を語らせているところがある。

前に引用した「身を徒らに巢守となし云々」の述懐のところにも「学校に在りし時とは違ひ同権又は愛情といふことを雛形通りには思はねども」とあり、そこには学問・新知識の面からくる無意識の抵抗らしいものも見える。また里の近所の細君の言葉や、夫の言葉などにも、その学問の生半可の害を語らせているところがある。

教育の学問のと申しても、女の学問は知れたもの、学問で台所は出来ませぬ。生中チットばかり見識があると、高くとまるのが女の持前、権利だの同権だのと齒の浮く事を言はれると、余ッ程の美人でも二度と見る気は出ぬものと、此間も宿の言はれました。と意気な細君の聞えよがし。(八四五ページ)

生意気に少しばかり権利だとか財産だとか、間違つたことを聴きかちつて自分の財産だと思ふだらうが(八五九ページ)

前者は里の近所の細君の言葉であり後者は夫の言葉である。これらは逍遙によつて積極的に肯定されているものでなく、また直接、細君お種の持つている缺陷とは称し難いが、これらの一般的な見解をかなり傍観的に肯定的に描いているように見える。

結局、逍遙は、あまりお種に好感を持つて描いていないということになる。もし逍遙が、新しい女性としてのお種に好意をもち、肯定的であるのならば、周囲からこのように見られてはいるが、実際はそうではないのだということと

人物として描かれているかということも、明らかにしなければならぬ。ときにはこのような夫の仕打を受けても仕方のないような女性であるかもしれないからである。そこに逍遙の描こうとした悲劇の様相も、意味も、変つてくることが予想されるからである。

小間使のお園や、女中の口から語られることであるが、お種の風貌・性格は次のように述べられている。

年は二十五六、中背にて姿はよけれど、瘦がたといふよりは瘦すぎといふ爪はずれ、貌はやつれ、色は青白く、額高く見えて、目は少し凹み、眉も生際もいと薄く、不人相といふでなければ、愛嬌は微塵もない、何処かにありさうなと探しても眼尻は少し釣り上り、小さい口もとは緊くしまり、額の上の青筋のみ只ありありと目について、どう見直しても、意地の悪さうな無気味な陰気な、勢のない

これでは、ほとんど、いや全くといってよいほど、取り柄のない女で、随分無慈悲な描き方だと言わねばならない。また学校時代の評判にしても、「負惜しみの強いのと愛嬌の乏しいので人に知られ(中略)何を言つても、学問の外に取所のない人」と言わせている。

このような、女としての潤いを全くといつてよい位に持たないお種が、更に学問をして、一層女としての愛情の美しさを發揮できぬようになってしまつたらしい書ぶりが見えるを、描き出さねばならないはずである。ただいささか、小間使お園の気持を述べたところで、「此やうな情ぶかいお人」とか「家中の人々一人として情深くない人はなし」とか「人情の深い内……阿園は是より又一層夫人を慕ひ敬ひぬ」とか言つているところがあるばかりである。それも、学問の及ぼす美点については何ら触れられてはいない。

このように見てくると、逍遙は、お種を不美人に作り上げ、その思想や学問をも、お種にとつてマイナスになるものとしてしか描いていないのであつて、この不幸、この悲劇の原因の一つを、他ならぬお種自身にも負わせていると見なければならぬ。意地悪い読者ならば、こんな女ならば、夫が家をあけても仕方はあるまいというように言うかもしれないのである。

こういうことになつてくると、片岡良一氏の「半ば目ざめた自我が不当に凌辱されるというこの期一般の悲劇的主題<sup>①</sup>」という言い方が、もう一つびつたり来ないのである。つまり、それならそれで、お種の思想以外に、容貌や性格にまで言及して、しかもそれを愛されぬようなものに仕立てる必要がどこにあつたかと言うことである。思想とか自我とか、少しも肯定的に描かれずに、さらに、それを支える人間を愛されないような人間にしてしまつていことは何か意味があつたとか考えようがない。したがつて、

片岡氏の言う「不当に凌虐される」という見方、それはつまりこの作品のテーマになるもので、重要なものであるはずだが以上のように見てくると、そのテーマがおよそはつきりしないということになつてくる。

これがテーマとするならば、時代の本質と結びつき、悲劇をかもしだす要素は、やはりこの場合、お種の新しい思想でなければならぬ。それが、ただ如上のように、近所の評判や噂として語られているだけで、お種の行為の上では、別に具体的には何にも描かれていないと言つてよい。まず言えば先掲の意気な細君の聞えよがしの言葉を聞いて、「それや此れやを聞くたびに、見事、立派に片附いて鼻をあかしてみせようと十六七までは我を張りぬ。」というところや、「一層のことこちらから離縁を言ひ出して、教員でもして食つてゆかう」と思うくらいのことである。それに、たとえ仕えやすい人であるにしても、姑にはよく仕えているし、実家の父を安心させるために、涙をのんで、離婚を思いとどまつてもいる。「女気の洋学も遂に儒学に勝たれしか、此身はどのやうにならうとも、父上に安心させたし、我慢しようと心を定め、夫人は其晩打萎れ、冠りし頭巾の裏を濡らして夫の家へ帰りたり」と書かれているのである。新しい思想に立脚しての行為はほとんど語られていないといつてよい。

あるいは、こうした我を屈した態度であつたにもかかわらず、お種は悲劇におこまれるのであるから、夫と、継母との悪玉ぶりは、生きてくるとも言える。それにしても、やはりお種の人間的な冷たさや、醜さは必然性のないものと言わねばなるまい。

このあたりで、一つの解釈を下すならば、逍遙の意図は、まず一応は、新しい知識人の裏面の醜さを否定し、批判することであり、同時に、新しい女性の半可通の学問がもたらすものをも否定し、批判するところにあつたのではないかと思われる。いわば、新しい女性が「不当に凌虐され」ることに重点をおき、そこに義憤を表わしたものでなく、むしろ、圧迫されたり、凌虐されるのにふさわしい女性と思われるのである。

ということは、お種のおかれた状態をあつてはならないとして描いているよりも、あり得る状態として描いているということである。つまり、そのテーマは何らかの理想を設定して、その上に組上げられたものではなく、一つの風俗的現象として発見された一つのケースであるにすぎないということになる。いわば、対象は風俗的につきはなされているのである。こう見てくると、夫定夫の醜聞も、横暴も、ともに、否定的形象ながら、風俗的傍観の態度を濃厚

にしているのではないかとこの疑がもたれる。ここに、テーマあるいは問題意識がぼやけざるを得なかつたのである。

ここで、この「細君」という作品が、彼逍遙の理論——「小説神髓」の写実主義の理論の忠実な実践であつたということが、はつきり認められると思う。「小説神髓」の写実主義が、結局は、文学主体の稀薄な、即物的風俗的な、写実のための写実の理論であつたことは既に明らかである。この理論が、いわば、心理描写、性格描写にいささかの深まりを見せてあらわれたのがこの「細君」であつたのである。

「妹と背かがみ」や、あるいはそれ以後の「此処やかしこ」「松のうち」等のなかに、いささかながら、青年の生活に取材して、その生き方を追求した主体的なものが、この「細君」にはほとんど失われているといつてよい。いわば、「書生氣質」へ逆行したというべき要素が、その根底に流れているのである。つまり逍遙の無目的な、また没主観の写実主義がここに具体化されたのである。

このように見てくると、この「細君」は、つきはなした悲劇の傍観であつて、最後にお園を殺してしまつたのも、うなづけるように思う。お園を殺す必要はないのではないか、という疑問は、先述のような、自我に自覚めた人妻の

悲劇としてテーマを仮定してみたところからおこるもので、没主観の風俗描写と見るならば、お園が井戸に投身するということも、悲劇に輪をかけることで全体の風俗的な暗さを一層深めるものとして、効果が期待されていたのであると思う。

この作品が、逍遙にしては、珍しく長時間を費して書かれたといわれているが、そのような苦勞をしなければならなかつたのは、この作品が、彼の持前と見られる啓蒙家の情熱に支えられた作品でなかつたからだと思われる。つまり、「小説神髓」そのものも、警世、啓蒙の情熱によつて綴られたものであつたが、「妹と背かがみ」以後の諸作は、比較的この情熱のままに、描かれたものであつた。ところが、「小説神髓」の主張は、彼が学びとつた、強引なまでの人情世態風俗の写実主義であつた。この警世・啓蒙の情熱と、写実至上主義的な写実とは、一致し難いものであつた。ことに、「妹と背かがみ」以後の「此処やかしこ」「松のうち」などの書生風俗のように、彼の体験によつて語り得る性質のものでなく、中流家庭の内部の風俗となると、多くの経験を持たず、素材自体にも写実し難いものを存していたと思われる。別して、逍遙の細君は、遊女であつて、女主人公お種とは全く裏はらの女性であつた。逍遙は、自分の妻が教養はなかつたが、愛くるしく、明るい暖い心の

持主であることに、ある程度満たされていたらしい。そういう彼の好みからして、容易に想像されることは、お種のような女性を忌み嫌つたであろうことである。そういう、彼の私的な好悪が、はからずも、新しい時代の女性を批判する下地をつくり、それを悲劇にまでおとしてみせることにもなつたと言えよう。「妹と背かがみ」の女主人公お辻が無教養の故に、悲劇的な結末をみせたのと、全く反対の結果を示しているわけで、この点にも、人生探求の作品と、風俗描写の作品との相違を発見できると思う。

以上のように「細君」は、当時の風俗の悲劇的な面を写実したもので、時代の新しい問題であつた婦人問題に取材しながら、積極的にその問題に解答を与えることができず、ただ男の醜さを描くに止つたものであつた。したがつて、この作品のテーマを、女性の立場の弱さに、集中することができずに、逆にこのような悲劇をあらしめ得るものとして、半可通の新女性を冷酷に描きすすめることになつてしまつたのである。

それにしてもこの作品のよさは、やはり当時の時代の新しいタイプの男女をかなり真実に近く表現し得ていることにあると思う。つまり、彼の写実主義理論を実践に移したものとして、注目されるべき点は依然として失われていない。もつとも、第三回で、不幸ということについて論じた

ところの直敘形式などは、写実の立場からみて、完璧とは言えないが、第二回の、実家でのお話、第四回のお園が質屋へ行くあたりの、お種の心理などは、かなりよく書けていると思われる。この風俗描写の点で、いささか時代とのつながりを持ち、当時の作品としては、また優れたもの認めることができよう。

なおこの作品は、二葉亭の「浮雲」に刺戟されて書かれたとも言われ、また彼自身、発表までに、二葉亭に読んで聞かせたりしているが、二葉亭が、文三のなかに自己を発見した文学主体を、結局、逍遙は成長させることができなかつたものようである。そして、自己のうちたてた写実主義理論にしばられ、風俗描写の枠に自らを閉じこめて、その限界に見切りをつけたのである。彼はこの作品以後本格的な小説の筆をとることをやめている。

(五八・二・六)

(註)

- ① 河出書房「現代日本小説大系」第一巻解説。
- ② 拙稿「逍遙『妹と背かがみ』試論」立命館文学、昭和三十三年一月号。
- ③ 逍遙の日記。
- ④ 坪内士行「坪内逍遙研究」他。
- ⑤ 逍遙の日記。

## 心敬における思索的特質について

岡 本 彦 一

日本の文芸論において、近世以前のそれはいちじるしく随筆的である。ことに中世におけるそれは秘伝口伝的である。少くともそこには、文芸の何たるかを論じてあるわけ

だから、その文に論理性というものがなくてはかなわぬわけであるが、実はそれがまことに稀薄であつて、論という体をなしておらぬものが多い。歌論に例をとれば、歌病の説明であり、歌体の説明であり、それらの例示であり、さもなければ、歌ことばの説明である。あるいは歌や歌人にまつわるお話であつた。そうしたものから次第に歌のみちを伝えようとして来たものの、それらは書簡の形式による伝授であり、または秘伝をさずけるていのものである。そもそも秘伝に論理的なものがあろうはずがない。非理論的、飛躍的、神秘的であるが故に秘伝である。これは兵法のお話であるが、さる武芸者が、自分にはとうてい秘伝は伝授されぬと見きわめて、ひそかに秘伝一卷を盗んだところが、

これが白紙であつたという話。話であるとしても、秘伝の性格を語つて躍如たるものがある。いよいよの伝授は白紙であつてよい。論理以前のものである。

和歌においては作家と評論家とは現代においても未分である。いや鑑賞者までが一体である。このことは短詩型文芸のいちじるしい特質といえよう。そもそも和歌というもの、その歴史に徴してみてもそういうものであり、連歌俳諧などは、その創作様式において、このことを顕著に表明している。それは、一座において興行されるということである。鑑賞という前提にたつてのみ創作といふことなのである。宗匠は指導者であり、作家であり、理論家であらねばならぬ。ところがすぐれた理論家かならずしもすぐれた作家というわけにはいかず、その反対もまたそうである。それよりも、理論に熱中すれば、いわゆる理論だおれになつて、その作品はもう一つはえない場合が多い。あ